

小倉桂子：核兵器廃絶実現の誓い

カッティヤ・ラタナディロック
タイ少年調査・保護局研究開発所所長



数えきれない悪夢とフラッシュバックは、トラウマ事案で多くのサバイバーが経験するストレス症状です。

原子爆弾投下の恐ろしさに関する啓蒙と教育に、自分の残りの人生を捧げようという誓いは、彼女が行なったとても痛みを伴う選択です。そうすることにより、彼女はその苦悶から逃げたり、距離を置いたりすることができず、逆にその痛みを伴う経験を何回も何回も味わうことになるのです。

彼女はとても生々しく、死にゆく人の顔、暗闇、あちこちで助けを求める声、破壊された彼女の家、町を語りました。彼女がその説明をととても明確にできたのは、彼女がその話を私たちにしてくれている間、あたかも彼女が、心の中で8歳の子供に戻り、1945年8月6日の朝、原子爆弾が爆発したその場所とその時間に戻っていたからです。

彼女が次世代をよりよくするために重要なメッセージ、すなわち平和で核兵器のない世界をつくること、を語り継ぐことは、とても難しい選択でした。

戦争の恐ろしさを説明するためにこうした悲劇的なイベントを、ときに行う必要があるのは不幸なことです。1945年8月6日朝、路上で、彼女がその爆弾に一人で向き合わねばならなかったとしても、核兵器拡散を終息させる小倉佳子さんの熱意をひとりのものにさせてはなりません。

私は第168回国際高官セミナーの参加者に呼びかけています。そして皆がこれを読んでいます。私たちは歴史と過ちから学び、いつでも、そしてどこでも、平和を求める声の一部となるようにしましょう。

世界に平和をもたらすのは国や政府ではなく、世界市民たる私たち一人ひとりが創り出す努力によるのです。



(右から順に) カッティヤ・ラタナディロックさん・小倉桂子さん